はじめに

†渋沢栄一という原点

会社に出勤するため、いつも通りＪＲに乗って日経新聞をひらいた。ふと目をやると、車内吊り広告にサッポロビールのうまそうな新製品の宣伝がある。帰りに買って帰ろうと思いながら、お金を下ろすのを忘れていたことに気づき、会社近くのみずほ銀行のＡＴＭに寄る。

そういえばもう年末、クリスマスは帝国ホテルで過ごして、初詣は明治神宮にでも行くかなあ。その前に聖路加（せいろか）病院に入院している祖父のお見舞いにも行かなくっちゃ……。

どこにでも転がっていそうな日常の心象風景のひとコマだが、驚くなかれ、ここに出てくる固有名詞すべての設立に関わった人物が、本書の口述者である渋沢栄一なのだ。

一般的な知名度は余り高いとはいえないが、実は渋沢栄一とは、

「近代日本の設計者の一人」に数えられる偉人に外ならない。

明治維新後、政治の世界でいえば、日本という国の基礎を作り上げたのは、大久保利通や伊藤博文、井上馨（かおる）といった政府高官たちだった。

一方で渋沢栄一は、日本の実業界、ひいては資本主義の制度を設計した人物だったのだ。詳しくは後ほどの小伝において述べるが、彼が設立に関わった会社は四百八十一社とされ（東京商工会議所調べ）、それ以外に五百以上の慈善事業にも関わり、後世、「日本資本主義の父」「実業界の父」と呼ばれてノーベル平和賞の候補にもなっている。

しかし彼の偉大さは、それだけではなかった。彼は今から百年以上前に、「資本主義」や「実業」が内包していた問題点を見抜き、その中和剤をシステムのなかに織り込もうとしたのだ。

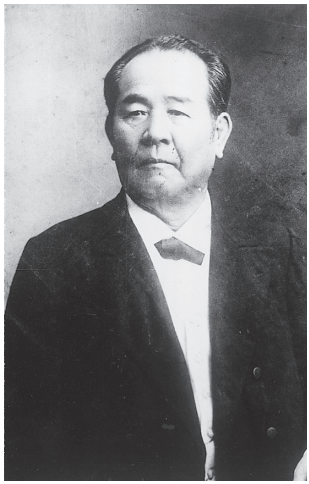
もともと「資本主義」や「実業」とは、自分が金持ちになりたいとか、利益を増やしたいという欲望をエンジンとして前に進んでいく面がある。しかし、そのエンジンはしばしば暴走し、大きな惨事を引き起こしていく。日本に大きな傷跡を残した一九八〇年代後半からのバブル景気や、昨今の金融危機など、現代でもこの種の例は枚挙に暇（いとま）がない。

だからこそ栄一は、「実業」や「資本主義」には、暴走に歯止めをかける枠組みが必要だ、と考えていた。

その手段が、本書のタイトルにもある『論語』だったのだ。

『論語』は、中国の春秋時代末期に活躍した孔子と、その弟子たちの言行録であり、その卓越した内容から後世、中国や日本、韓国、ベトナムなどの各国に大きな影響を及ぼしていった。いずれの国においても、

「人はどう生きるべきか」



渋沢栄一（1909年）
資料提供：渋沢史料館

「どのように振舞うのが人として格好よいのか」

を学ぼうとするとき、その基本的教科書になっていたのがこの古典だった。

栄一は、この『論語』の教えを、実業の世界に植え込むことによって、そのエンジンである欲望の暴走を事

前に防ごうと試みたのだ。本書のちょっと奇妙なタイトル『論語と算盤』とは、まさしくこの思想を体現している。

ここで現代に視点を移して、昨今の日本を考えてみると、その「働き方」や「経営に対する考え方」は、グローバル化の影響もあって実に多様化している。「金で買えないモノはない」「利益至上主義」から「企業の社会的責任を重視せよ」「持続可能性」までさまざまな価値観が錯綜し、マスコミから経営者、一般社員からアルバイトまでその軋轢（あつれき）のなかで右往左往せざるを得ない状況がある。そんななかで、われわれ日本人が、

「渋沢栄一」

という原点に帰ることは、今、大きな意味があると筆者は信じている。この百年間、日本は少なくとも実業という面において世界に恥じない実績を上げ続けてきた。その基盤となった思想を知ることが、先の見えない時代に確かな指針を与えてくれるはずだからだ。

†今、なぜ現代語訳か？

さて、本書はそんな『論語と算盤』のなかから重要部分を選び、現代語に訳したものだ。栄一は、本書のなかで、次のように語っている。

「（『論語』を小難しくとらえようとする学者は）口やかましい玄関番のようなもので、孔子には邪魔ものなのだ。こんな玄関番を頼んでみても、孔子に面会することはできない」

この指摘を借りていえば、本書が目指したのも、渋沢栄一家のよき玄関番に外ならない。

昨今は、漢文調の文章を読み辛いと感じる人が増え、栄一という近代屈指の偉人と出会いにくくなってしまった。だからこそ、中学生でも気軽に会いに行けるような、そんな玄関番になって、栄一の魅力をぜひ多くの人に知って欲しいと考えたのだ。

どの程度その試みが成功しているかは、読者からの指摘を待つしかないのだが、「噛み砕いて訳しすぎ」「超訳になりすぎ」といった批判であれば、若い人を精一杯の笑顔で栄一に案内しようと努めた玄関番の咎（とが）として、甘んじて受けたいと考えている。

最後に、『論語と算盤』という本の成り立ちについて簡単に触れておきたい。

本書は渋沢栄一が書いたわけではなく、その講演の口述をまとめたものだ。

一八八六年、渋沢栄一を慕う人々が竜門社（りゅうもん）という組織を作った。これが現在の渋沢栄一記念財団の前身となったのだが、この竜門社が『竜門雑誌』という機関誌を発刊、栄一の講演の口述筆記を次々と掲載していった。そのなかから、編集者であり実用書の著者でもあった梶山彬が、九十項目を選んでテーマ別に編集したのが本書になる。大正五（一九一

六）年に東亜堂書房から発行され、以後、国書刊行会や角川学芸出版から再刊されてもいる。

渋沢栄一の言葉を編んだ本はこれまでに何種類も出されてきたが、この『論語と算盤』は、彼の自叙伝である『雨夜譚（あまよがたり）』（岩波文庫）と並んで、もっとも読みごたえのある入門書といってよいだろう。

なお、本書の記述の中で、年代に関して栄一の明らかに記憶違いであろうというものに関しては、訂正を施してある。

最後に、本書の刊行にあたっては、企画を快諾して頂いた筑摩書房の増田健史新書編集長、そして編集担当の小船井健一郎氏、さらには渋沢栄一記念財団の方々――特に井上潤渋沢史料館館長と、渋澤健コモンズ投信会長に多大なる御指導と御助力を頂いた、深甚なる謝意を捧げたい。